

して見習士官の位を贈り冥福を祈りました。私共当時の教官としては永久に忘れられない事件で、特に御遺族に思いをいたすとき残念な惨事でありました。

私達は幸いにして勤務地、任地の差から生を得て今日まで生き延びていますが、常に亡き戦友、先輩、後輩のご冥福を祈り続けねばならないと誓っております。

前橋の場合の卒業生は七〇〇〇人ぐらいおりますが、その中約二五〇〇人が戦死しています。高野山の奥の院に慰霊碑を建て、二年毎に供養の法事をしていゝる。私もあの時代の人々と年々回ぐらい参集してはいますが、会社社長や大学教授など悠々自適の方たちも、昔を語り、「大変な苦勞であったが、あの時の労苦が、戦争の体験が、残された人生でプラスになることが非常に多い」と申しています。我々は英霊の冥福を祈りながら、新しい日本の建設に頑張らなければと思いません。

## 満州入営より六十年 公務に奉仕

岐阜県 下畑 春造

私は昭和十一（一九三六）年八月、一年早く志願兵として徴兵検査を受け甲種合格となりました。なぜ、一年早く志願をしたのかと、今になると他から尋ねられますが、当時の日本国内の状況や、世界の中で日本の立場がだんだんと不利になり、我々若い者は危機感を、ひしひしと感じている時期であったのです。

そして、国内も、特に農村は冷害とか不況で、私たちの周囲を見ても何か不安であり、満州事変以来、満州国の建設などもあり、満州大陸に活を求める気運が、日本国内、特に農山村の人々の心にありましたし、国策としても、そのように導いていたのでありましょう。私もそのような環境の中に居たので、日本の一青年として、一年でも早く、軍隊に入ろうと思っていました。

そのために、志願としては満州の独立守備へ入隊を希望しておることを、当時の青年学校の指導教官にお願いをしております。それが現実となったのは、翌、昭和十二年二月でありました。

私は、二月に一般の徴兵（甲種合格者）と一緒に入営することとなり、関東軍に編入し満州へ行くことになりました。私の村からは、上西佐一郎君と二人で、村民の皆様方の多数のお見送りをいただき、まさに歓呼の声で送られながら高山線の国府駅を後にしたと、その時の私の覚悟を今でも想い出されます。

飛驒地方の入営兵は、約束の如く高山駅に集合し、お互いに出合い整列をしました。飛驒県事務所長の前名三蔵さんから、お祝いと激励のご挨拶を受け、我々一同は勇躍として征途についたのであります。

途中、京都で一泊しまして、広島で二泊目となり、宇品港から満州に向けて出帆したのであります。

黄海を北上し、日露戦争で有名な旅順港に着岸し、激戦地となりました。難攻不落と言われた旅順の要塞

を見学し、日露戦争の慰霊碑に参拝しました。数年後の大東亜戦勃発前、特に支那事変の始まる数カ月前のことでしたから、新しい兵隊に日露戦の実感を教育させることも目的であったのかもしれない。従って名所旧跡の見物とは趣を異にする緊張感を、我々は内心感じていました。

見学を終わって、直ちに満州へ向かっての出発です。関東州から奉天（現在の瀋陽）、新京（現在の長春）、ハルビンと、幾晩も列車の旅を過ごし、龍鎮にようやく到着しました。無事に独立守備隊第二十六大隊第四中隊の兵舎に入りました。この龍鎮でも、日本人開拓団の方を駅頭で見かけました。我々軍隊だけでなく、一般日本人も農業に志を持って、満州を新天地にしようとは、はるばる龍鎮まで来ているのですから、我々も、その人たちに負けず励まなければならぬと心に決したのです。

満州は春といっても寒さは厳しく、飛驒育ちの我々も、零下何十度という寒さは身にしみました。

初年兵教育は、匪賊の多いという満州ですから、実戦を兼ねるような敵しいものでありました。広範な地域を守るのが独立守備隊ですから、基本教育は勿論ですが、北支ではもう支那事変の最中で、事変勃発一年頃の八月、龍鎮での初年兵教育も終了し、一期の検閲も受け、ようやく一人前の兵隊の仲間入りをすることが出来ました。

以来、独立守備隊本来の勤務についていたのですが、昭和十四年三月、中隊の警備区域が変わることになって方正に移動しましたが、ここでも日本人を多く見受けました。満州国が建国し、日本でも満州でも、五族協和という言葉が盛んに使われていましたが、旧軍閥は自分の領分を日本軍に取られ追われていましたし、共産軍も国民軍に対抗し、民衆を味方にする巧妙な戦術で勢力を伸ばそうとしていました。

また、当時欧州では独ソ戦が始まっており、中国本土では日本軍が奥地まで進攻していて、騒然とした国際情勢を反映し、満州の日本軍も本格的に改編していったようでした。これが、我が部隊の方正への移動

につながっていたのかもしれない。

五月になり、宮崎中隊長以下、警備区域を巡回中、突然匪賊（共産軍か）の襲撃を受けました。私の分隊の機関銃手であった福島県出身の柳沼熊一君が匪賊の銃弾を受け、名譽の戦死を遂げられました。

匪賊は我が軍の反撃によって撃退しましたが、少数の兵力での警備地域巡回中のことであり、戦死者を伴って進撃出来ぬので、戦死者を火葬にすべく、中隊長の命により、薪木を集め茶毘に付し、夕方近くになって御遺骨を背囊の中に納め、次の地域へ出発しました。

予定の警備地の巡回も終わり、治安を回復して駐屯地に帰還をしました。その頃は、ノモンハン事件の最後の時でしたから、日ソが開戦するかもしれない時期でもあったので、中隊長の警備区域巡回もあり、襲撃した匪賊は共産ゲリラであったのかもしれない。

昭和十四年八月、戦死された柳沼君の遺骨宰領の命令を受けました。私は入隊して二年半ですが、特に志願兵でもあるので、内地へ帰る機会を与えてくださっ

たのかもしれない。同行者は同年兵である富山県の谷川君であり、他の戦死者の遺骨を奉持し、二人で中隊を出発しました。

内地において、福島連隊区の遺骨受領者の軍曹殿に申し送り、責任は終わりました。故郷飛驒に帰り、一週間の滞在許可を頂いておりましたので、家族や親戚、友人達と積もる話をして楽しい日々を過ごすことが出来ました。戦死した柳沼君の御遺族には申し訳なような気もしましたが、亡き戦友のお陰と感謝した日々でありました。谷川君とは打ち合わせてあり、富山駅で会って、朝鮮経由で二人共々元気で原隊に帰ることが出来ました。

その後も、匪賊討伐や新兵の教育、対ソ連戦の訓練等で、古参の兵として三度目の冬を越し、昭和十五年三月、中隊残留組の同年兵五人が満期除隊となり、朝鮮経由で内地へ帰還しました。

私は除隊間近になって、在滿就職を人事係准尉殿にお願いをしていました。なぜかと申すと、戦友の遺骨宰領で内地にも帰れましたし、満州の地にも馴染んで

もきましたし、満州の前途にも希望もありました。また、日本内地から多くの人達が広い満州の開拓団として来ていまして、これから、満州の時代が来るであろう、まだ若いのだからと思っていました。今にして思いますと、これが、当時の青年の心意気ではなかったかなあと思い出します。

幸いにして私の希望がかない、勤め先が満州鉄道株式会社、南滿鞍山市満鉄立山駅に決定いたしました。故郷に五日間休養して再び満州に帰りました。

この鞍山市立山駅、満州随一の貨物駅に就職いたしましたら、一日三交替の勤務はなかなか忙しい毎日でありました。しかしながら、これが満州就職第一歩であり、大いに頑張って努力いたしました。

内地からの母の便りで、立山区には我が故郷、国府村出身の池田さんが居住しておることが判りました。一度お会いしたいと思っておりましたところ、たまたま池田さんの方からお出でをいただき懐かしい故郷のことなどを語り合いました。

いろいろと話をしているうちに、池田さんも軍隊が

終わって、満州炭鉱会社に勤めておられることを聞き、また、池田さんの弟さんも炭鉱会社に勤めておられる様子なので、私も炭鉱会社へ是非とも就職出来ませうようお願いしておきました。

昭和十六年四月、阜新炭鉱会社に就職が決まり、住所その他の移転の手続き等、すべて終わって移転しました。昭和十八年四月十日、ふさ子との結婚が決まり、挙式のため三年ぶりに帰郷し結婚式を挙げ、ふさ子同伴、再度渡満、阜新炭鉱会社に勤めました。

昭和十九年、阜新炭鉱病院で子供が誕生し、同年六月、本社用度課へ栄転となり、阜新市へ転居しました。もう、その頃になると、大東亜戦争もますます激しくなり、友人や先輩達が次々と召集されていききました。

私もいつ赤紙召集が来るか判らないので覚悟はしているものの、異郷の地で妻や子供のことを考えたとき、なにかと心配でした。幸か不幸か、お召しもなく、専ら関東軍の至上命令である出炭、増産に一意専心努力してきました。

そこで運命の日、昭和二十年八月十五日、ラジオ放送によって終戦となったことを知りました。

そして、ソ連軍が阜新市へ進駐してきました。

昭和二十年十一月八日 ソ連軍が阜新市を撤退。八路軍が進駐して来ました。

昭和二十一年一月四日 八路軍が撤退。国府軍が進駐してきました。

昭和二十一年五月二十二日 満州から日本人は引き揚げるよう指示があり。

昭和二十一年六月一日 北支胡蘆島で乗船、佐世保に上陸しました。

満州阜新市を出発して、十七日目でようやく我が家に帰ることが出来ました。命からがら引き揚げて来ましたが、妻は、終戦後の苦勞で床につき、ついに日本赤十字社病院に入院、そして十二日に仏様のもとに帰って行きました。

私は、軍隊入営以来故郷の土は二度と踏めないと覚悟して渡満したのですが、どうにか生きて帰郷出来たことは神仏のお陰と、ただただ感慨無量であります。